

令和元年度（平成31年度）「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1 調査日 平成31年4月16日（火）

2 調査対象 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

3 調査内容

(1)教科に関する調査

○調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～6学年> 国語、社会、算数、理科

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

品川区立大井第一小学校

令和元年度（平成31年度）「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組（国語）

（1）各教科の定着状況についての概要

全学年において教科の正答率が、目標値、全国平均を上回っている。「話すこと・聞くこと」「読むこと」については、目標値、区平均、全国平均を上回っている。

昨年度までの学力定着度調査の課題を受けた取組の成果と考えられる。具体的には、以下のとおりである。

- ・言語事項を主に扱う単元だけではなく、物語文や説明文の学習中にも主述の関係や修飾語等を意識できるような活動を行う。
- ・短時間でできる視写教材を活用して句読点やかぎかっこの使い方を練習したり、授業や朝学習の時間にローマ字の反復練習を行ったりする。
- ・話を聞いて質問し合う活動、話を聞いてメモを取る活動を取り入れる。
- ・個別指導で漢字の定着を図ったり、短作文に繰り返し取り組ませたりすることで、国語の学習における成長を自覚させ、書くことへの意欲や自信をもたせる。

（2）具体的な課題

- ・正答が一つでない問題に対して答えられない児童がいる。
- ・二つ以上の資料を視点を決めて比較したり、自分の考えを文章に表現したりすることに課題が残る。
- ・「ローマ字」「国語辞典の使い方」が十分に定着していない児童がいる。
- ・聞きたいことをもとにインタビューの質問内容を考えることが難しい。
- ・既習の漢字が正しく書けない、漢字の音訓、同音・同訓の漢字の使い分けが身に付いていない児童が見られる。

（3）課題の原因として考えられること

- ・低学年では発達段階による差が大きく、思ったこと、考えたことを文章にすることができない児童と正しい文章が書けない児童がいる。
- ・いくつかの資料について、視点を決めて比較するという経験が少ないため、比較・考察することができていない。
- ・国語の授業だけでは定着が不十分であるため、ローマ字の正答率がやや低い。
- ・国語辞典などを用いることが日常化していない。
- ・調べ学習などで定期的な学習経験の不足が定着を妨げている。

（4）課題解決のための方策（取組指標）

- ・視写の学習を増やしたり、テーマを決めて自分の考えを書く学習を増やしたり、自分の考えを書いたりして、書く力を高める。
- ・調べ学習において、パソコンを使用させ、意識的にローマ字入力を指導する。
- ・分からない言葉は日常的に辞書を用いる習慣を付けさせる。
- ・漢字は定期的な家庭学習や朝学習において習熟を図る。また、小テストで確認・定着を図る。同音・同訓の漢字は、文章の意味や前後関係から適した漢字が使えるように辞書を活用する学習を取り入れる。

（5）次年度の数値目標（成果指標）

- ・学期末、学年末のテストを全学年で行い、到達目標値80%の児童8割以上を目標とする。
- ・学力定着度調査では、全国平均正答率+5Pを目標とする。

令和元年度（平成31年度）「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組（社会）

（1）各教科の定着状況についての概要

全学年において、教科の正答率は目標値、全国平均を上回った。社会の学力は十分に定着しているといえる。昨年度までの学力定着度調査の課題を受けた取組の成果と考えられる。具体的には、以下のとおりである。

- ・資料を分析していく力を付けるために、写真やイラスト、表、グラフなどから読み取れることをまとめノートに書いたり、発表したりする学習活動を授業で展開していく。
- ・ICT機器を活用し、グラフや写真を授業で視覚的に提示し、読み取りをさせたり、グループ活動で互いに見付けたことを対話し意見交換したりして、広い視点で理解を深められるようにする。また、地図や年表、地球儀などを教室でいつでも見られるように学習環境を整備する。
- ・地図帳を活用して地名調べをさせたり、都道府県カルタを用いて都道府県の名前を覚えさせたり、フラッシュカードを用いて地図記号や国旗当てゲームをしたりなど、授業の導入などでアイスブレイクしたりできるようなゲームを取り入れる。
- ・社会科見学等の体験的活動後、学習のまとめに、新聞作りやポスター作りなどを行い、インターネットや本を活用した調べ学習をし、学習内容を自分の言葉でまとめられるようにする。

（2）具体的な課題

- ・地図記号を問われる問題で正答率が低かった。
- ・資料を読み取り、自分で考えて、文章で表現することが苦手な児童が多い。特に情報モラルに関する問題は20%が無回答だった。
- ・児童によっては、既習事項や知識が定着していない。
- ・「自動車をつくる工業」における溶接工場や組み立て工場での作業に関する問題で正答率が低い。

（3）課題の原因として考えられること

- ・地図記号を使った地図の読み取りなど、資料の活用が日常の授業でされていない。
- ・資料の読み取り方や読み取ったことをまとめ、自分の言葉で表現する活動が十分でない。
- ・「自動車をつくる工業」の学習では、知識として言葉を知っていても、実際にどういう内容なのか理解が定着していなかった。

（4）課題解決のための方策（取組指標）

- ・地名が出てきたときには地図で位置や地形の特徴を確認することを他教科でも日常的に行っていく。
- ・簡単な資料の読み取りから分かることを文章化することを繰り返す。さらに、グループ活動を通して違いや特色に気付かせ、疑問や考えがでるように授業をすすめる。
- ・資料から読み取ったことを自分の言葉で書いたり話したりして表現するなどの言語活動を授業に取り入れる。
- ・フラッシュカードなどで、地図記号や地名、地形の特徴に関する知識や言語を定着させた後、言葉だけでなく、意味とともに理解できるよう、小テストなどで定着を図る。

（5）次年度の数値目標（成果指標）

- ・学期末、学年末のテストを全学年で行い、到達目標値80%の児童8割以上を目標とする。
- ・学力定着度調査では、全国平均正答率+5Pを目標とする。

令和元年度（平成31年度）「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組（算数）

（1）各教科の定着状況についての概要

全学年において教科の正答率が、目標値、区平均、全国平均を上回っている。「数と計算」「量と測定」において、目標値、区平均、全国平均を上回っている。

昨年度までの学力定着度調査の課題を受けた取組の成果と考えられる。具体的には、以下のとおりである。

- ・習熟度別指導を児童の習熟度に応じて、授業内容や指導体制を工夫して効果的に行う（中・高学年）。また、指導助手を活用したり、学習環境を工夫した少人数指導をしたり課題に合わせた指導を行う（低学年）。
- ・「図形」領域においては、授業の中に立体の弁別、工作、作図などの算数的活動を多く取り入れて、作業を通して平面図形・空間図形を捉える力を付けさせる。また、構成要素やその関係などを、実感を伴った理解を促す指導をする。
- ・学力が十分に身に付いていない児童に対しては、スモールステップで確実に理解できるようにしたり、基礎基本の知識、技能に限定した習得目標値を設定したり、問題数を児童に合わせて取り組ませたりして達成感を高め学習意欲を支えていく。

（2）具体的な課題

- ・ 減法の式から文章問題を作る問題では、正答率が低い。
- ・ 「はかりの目盛りの読み方」「棒グラフを適切に書く条件」が課題である。
- ・ 設問の意味を正しく把握したり、設問の条件を読み取ったりする力が弱い。
- ・ 小数の計算（整数÷小数）では、計算の仕方が正しく身に付いていない。
- ・ 百分率とグラフ（グラフの根拠を示す）では、目標値より－10ポイントとなっている。

（3）課題の原因として考えられること

- ・ 計算技能や知識の習得に授業時間を要し、問題作りなどの経験が少ないことが考えられる。
- ・ 問題の内容を線分図などに表す経験が不足していることが考えられる。
- ・ 百分率とグラフの学習では、文章から条件を読み取って考えたり、読み取ったことを活用したりする経験が少ないことが考えられる。
- ・ 図形に関しては、作図の仕方や図形の性質が十分に体得されていないことが原因と考えられる。

（4）課題解決のための方策（取組指標）

- ・ 自分で問題を作る体験を増やすことで、場面を正しく把握する力を伸ばしていく。
- ・ テープ図、線分図、数直線など、視覚的に分かるように提示し、活用できるように指導していく。
- ・ 大タイム、ステップアップ学習や朝学習に復習し、基礎基本の定着を図っていく。
- ・ 百分率とグラフでは、授業内で自分の考えをグラフに書き入れる活動をする。計算で求めた内容が何を表しているかを表現できるように指導する。
- ・ 図形の学習では、分度器やコンパスの使い方に習熟できるよう、繰り返し指導する。

（5）次年度の数値目標（成果指標）

- ・ 学期末、学年末のテストを全学年で行い、到達目標値80%の児童8割以上を目標とする。
- ・ 学力定着度調査では、全国平均正答率+5Pを目標とする。

令和元年度（平成31年度）「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組（理科）

（1）各教科の定着状況についての概要

教科の正答率は全国平均と同程度または上回り、おおむね良好な状況である。

昨年度までの学力定着度調査の課題を受けた取組の成果と考えられる。具体的には、以下のとおりである。

- ・ 実験や観察を通し、個人が実物になるべく多く触れる環境を整える。実物が難しい場合は写真や映像など ICT 機器を活用し投影する。時間と共に変化するのは、映像で見せる。
- ・ 技能面では、実際に取り組むだけでなく、時間をおいてプリント学習にも取り組み、実際に体験したことを整理させ、定着を図る。
- ・ 推察については、日々の取組の中で自分の頭で考える活動だけでなく、目に見えないことについて考える活動に取り組む、思考する力を高める。

（2）具体的な課題

- ・ 「植物のからだのつくり」の理解は高いが、ハウセンカの種の正しいまき方についての内容の理解が不十分である。
- ・ 「電気の通り道」では「回路」という言葉が、「顕微鏡の使い方」では「カバーガラス」という名称など、理科で使われる言葉の定着が不十分である。
- ・ 器具の正しい使用方法を理解したり、実験で測定した結果がどのようなことを表したりしているのか考えたりする力が不十分である。
- ・ 顕微鏡の使い方についての理解が全国平均を下回った。

（3）課題の原因として考えられること

- ・ 植物のからだのつくりの問題では、情報の見落としや名称などの知識の習得が不十分であった。
- ・ 植物を育てる機会が少なかった。
- ・ 器具を初めて使用するときに正しい方法を確認するが、2回目以降は確認が不足していた。
- ・ 顕微鏡は使えるが、「カバーガラス」などの名称や、実際の微生物の名前や、各花の花粉の形を覚えるまで学習をしていないためこの結果になったと思われる。

（4）課題解決のための方策（取組指標）

- ・ 用具や現象の名称などの知識を定着させるために、繰り返し指導する。
- ・ 年間を通して植物を観察するなど、実物に触れる経験を大切に、知識として理解するだけでなく実感を伴った理解を深める。
- ・ 用具を使って実際に観察等を行う学習の機会を多くする。そのための教材教具の充実を図る。
- ・ 顕微鏡でいろいろなものを観察するだけでなく、動画教材などを使い知識としての学習を行う。顕微鏡は LED タイプだけでなく反射鏡タイプの使い方もおさえる。

（5）次年度の数値目標（成果指標）

- ・ 学期末、学年末のテストを全学年で行い、到達目標値 80% の児童 8 割以上を目標とする。
- ・ 学力定着度調査では、全国平均正答率+5P を目標とする。